背中に騎手を乗せ、騎馬が立ち上がる。紅白の騎馬は互いに様子をうかがいながら、じりじりと間合いを詰めていた。

そこへ戦士たちが走り込み、全身のバネを使って勢いよく湯を掛ける。

吹き付ける冷風が容赦なく体温を奪い、とろみのある湯が痛みとともに視界を奪う。

しかし、古本さんは、何度湯を掛けられようと、そのがっしりとした腕で顔をぬぐい、力強いまなざしで相手をにらみ付けている。

相手も、その眼光を全身で受け止めるような気迫で、一歩も引く様子はない。

そんな両騎が、ぶつかる時がきた。

ガツンと音がしそうなほどの衝撃。しかし両騎の騎手は、ひるむことなく相手の頭へ手を伸ばす。つかみ合い、顔を押しのけ、ひたすら目の前の鉢巻きを求め続ける。

騎馬たちもまた、そんな2人の愚直な戦いを見届けようと、湯と風に耐えながら、必死の形相で騎手を支え続けている。

辺りには湯気が立ち込め、彼らの姿がほとんど見えない。

やがて湯気が風にさらわれると、われわれの目の前に、赤い鉢巻きをしっかりと握りしめた一人の騎手が現れた。

古本さんだ。

古本さんが、勝ったのだ。

古本さんは騎馬から降り、駆け寄ってくる仲間たちと熱い抱擁を交わす。

赤い鉢巻きを握りしめた腕を高く掲げると、古本さんは豪快に笑ってみせた。